

## 鑑賞の手引

楊洲 周延 <<幻燈写心競 女史演説>>

版画(多少木版)／明治23年(1890年)／KCI所蔵



©KCI

### ■ 作者について

楊洲周延(ようしゅう ちかのぶ)は、幕末から明治にかけて活躍した浮世絵師です。越後(新潟)の下級藩士の家に生まれました。浮世絵師になった後も、幕末の動乱期には旧幕府軍として戊辰戦争で戦った珍しい経歴をもっています。明治の初めには、歴史絵や幕末の戦争絵などを描いていましたが、やがて、江戸時代には絵にすることが禁じられていた江戸城大奥の女性たちの日常を描いたシリーズを発表し、一躍大人気となりました。さらに、明治政府の欧化政策のもと公式の場で洋服を着用する皇族や華族の群像や、きものに洋風小物を取り入れた新しいファッションの女性たちの姿などを数多く描きました。

### ■ 作品について

「幻燈」とは、今日のスライドプロジェクターの原型ともいえる装置で、18世紀に西洋から日本に入ってきました。ガラス製のスライドに描かれた絵や写真をレンズによって拡大、投影し、光源にはろうそくやランプ、後にガス灯や電燈が使われました。明治時代には、人々の娯楽として楽しまれると同時に、学校の教育ツールとしても使われました。「幻燈写心競(げんとうしゃしんくらべ)」と題された周延のこのシリーズでは、文明開化の時代の女性たちの夢や憧れが、幻燈に見立てた背景の丸い円のなかに描き出されています。

### ■ 鑑賞のポイント

1. 日本女性の洋装は、明治時代に、皇族や華族といった上流階級から始まりました。一方、西欧の要人と接する必要のなかった一般の女性たちは、昭和初期まできもので過ごす人が多く、アクセサリなどに洋風を少しずつ取り入れて、新しいおしゃれを楽しんでいました。手前に描かれるのは当時の女学生で、きものなかに長袖のシャツを着て、ブーツを履き、手に洋傘をもっています。髪には、洋風のアイテムとして当時流行した、造花の髪飾りをつけています。女性の右側にはポインターらしき犬が描かれます。この頃、西洋から渡来した洋犬をペットとして飼うことが流行しました。本展では他にも、きものに洋風小物をあわせたり、西洋的な文化を楽しむ女性たちの絵が展示されています。探してみてください。

2. 円のなかの女性は、当時流行したかたちの洋服を着て、男性たちに向かって演説をしています。男性たちは、女性に拍手喝采を送っているようです。日本では明治の初めに、女子の高等教育がはじまり、西洋の文化や動向について知識を吸収し、社会で活躍する女性たちがあらわれました。この絵では、小脇に分厚い本を抱えた女学生の、勉学に励んで社会を導く先端的な女性になりたいという夢があらわされています。本展でも、明治時代の女性が実際に着た洋服や、洋装姿が描かれた絵を探すことができます。女性たちは慣れない洋服を着て、新しい文化に触れ、どのような気持ちだったのでしょうか。